国語　神戸大学　（前期）１／３

一

問一

人間以外の生物にとって、死とは突然訪れる不可避の現実でしかなく、人間のように観念的に捉えて恐怖したり、知的営為によって克服しようとしたりはしないということ。（七十八字）

問二

人間は、死の恐怖を克服するために死を超えた価値の存在を信じようとする知的営為によって、逆に多くの死に直面し、一層死を恐れ、生への執着に翻弄されているということ。（八十字）

問三

生物としての自己に突然訪れる死を根本的に自覚することは、逆説的にも、死を克服したいという願いを前提とした人間特有の観念的な論理によってこそ可能になるということ。（八十字）

問四

人間は、生物として突然の死を迎える存在であると同時に、死を恐れ、拒絶しようとするが、死を超えた価値を信じようとする知的営為によって死を超克しようとするのでも、生に固執して逆に死へ傾斜するのでもなく、かけがえのない自己も死すべき存在であると根本的に自覚することで、死の克服という願望を乗り越え、死を受容すべきだということ。（百六十字）

問五

（a）災禍　（b）初発　（c）要請　（d）典型　（e）奥義

© 河合塾　2025 年

二

問一

① 早く物語を読みたいと思っていたことなので

② 誰が物語を探して、私に見せてくれる人がいるだろうか、いや、そんな人はいない

③ 夫婦仲がうまくいかないようで

④ 物語を読みたい気持ちも感じなくなってしまった

問二

庭の梅が咲く頃の来訪を約束してくれた継母がその時期になったが音沙汰もないので、来訪を待ちわびる心情。（五〇字）

問三

乳母の死を悲しんでいる時に、行成の娘の死を聞き、手本にしていた彼女の美しい筆跡に残る、死を予兆するような古歌を見たこと。（六〇字）

問四　a　たれ　b　たる　c　たり

問五　イ

© 河合塾　2025 年

三

問一

① まさに～べし
② かつて
③ いずくんぞ
④ あせをながさざる（は）なく

問二

崔弘度

問三

側に仕えている者たちが、すっぽんは美味しいかとたずねられ、食べてもいないのに崔弘度を恐れて美味しいと答えたのは、日頃の戒めにそむいて嘘をついたことになると崔弘度は考えたから。

問四

たとえ三升の酢を飲んだとしても、崔弘度には会いたくはない。

問五

崔弘度が部下の役人を厳しく戒めていたのと同様に、自分の一族の者にも厳格であったため、その一族がととのっていておごそかであったと称賛された。（六十九字）

© 河合塾　2025 年